まえがき

1964 年オリンピック東京大会（第 18 回オリンピック競技大会（1964/ 東京））が開催されたのは、私（編集代表者）が大学 3 年のときでした。当時は第二次世界大戦後 20 年以上経っていましたが、日本はまだまだ貧しい状況にありました。しかしこれを契機に、東海道新幹線や首都高速道路が整備されるなど、戦後が終わり新しい時代が始まったという印象が強く残っています。

東京オリンピック大会での日本のメダル獲得数は 29（金 16、銀 5、銅 8）で、その活躍には目を見張るものがありました。また、多くの人たちにスポーツの素晴らしさを伝える引き金にもなりました。こうした背景には、1961 年に制定された「スポーツ振興法」に基づくスポーツ環境（指導者、施設・用器具、強化費など）の整備がありました。スポーツ科学もこのときに飛躍的に発展しましたが、萌芽期であったこともあり、実践の場と研究の場との間には大きな壁があったことを思い出します。

一方、パラリンピックの起源は、第 14 回オリンピック競技大会（1948/ ロンドン）の開催期間中に行われたストーク・マンデビル競技大会とされています。1964 年 11 月には、第 13 回国際ストーク・マンデビル競技大会が「第 2 回パラリンピック競技大会」として、東京で開催されています。当時の日本は障害者スポーツに馴染みがなく、日本代表選手も外国人選手の明るい自信を持った振る舞いに驚いていたと言われています。しかし、その後は関係者の尽力に加えて、メディアなどの障害者スポーツやパラリンピックの報道により認知度は高まり、多くの種目において競技力も国際レベルに到達しています。その背景に、障害者スポーツ / パラリンピックの所管が厚生省（現厚生労働省）から文部科学省・スポーツ庁に移り、日本オリンピック委員会（JOC）と日本パラリンピック委員会（JPC）の連携が強化されたことも要因の 1 つであると思います。ここにときの移ろいを感じます。

上記の 2 つの大会から 55 年が過ぎて、今日本は、「第 32 回オリンピック競技大会（2020/ 東京）」と「東京 2020 パラリンピック競技大会」を迎えようとしています。

周知のように、日本は様々な分野において世界のリーダー的存在になっています。競技スポーツ界も多くの種目において、国際大会で活躍する姿がよく見られるようになっています。かつては国際大会で敗けると「技術・戦術はよい

が体格・体力に劣る」と釈明していたことが信じられないほどです。まさに隔世の感があります。こうした背景には、外国人をも含む優秀な指導者の存在、コーチング・トレーニング方法の改善、スポーツ施設・トレーニング施設の質量面の整備、スポーツ科学の発展、実践者と研究者の歩み寄り、豊富な運営・強化資金、実践者の生活の保証（プロ化も含む）など、トレーニング環境の整備充実が挙げられます。またこれには、2011 年に公布された「スポーツ基本法」も大きな力になっていると思います。「2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会」が実に楽しみです。

とは言え、「2020 年」以降を見据えると、国・地方自治体や企業などの支援が減少し、上述したコーチング・トレーニング環境が劣化する恐れがあります。加えて、少子化によりスポーツ人口そのものが減少していくことも予想されています。国際競技力のさらなる発展を考えると、競技スポーツ界も安穏としていられない状況が待っています。このような状況を踏まえると、ここで競技スポーツの将来を展望しておくことは意味のあることと考えられます。本書を「競技スポーツにおけるコーチング・トレーニングの将来展望」というタイトルにした理由はここにあります。

私は、かつて筑波大学の体育専門学群（学士課程）、体育研究科（修士課程）、体育科学研究科（博士課程）において、体力学、体力トレーニング論などの授業を担当するとともに、いわゆるゼミ（高松研）で学生たちと卒論・修論・博論の作成などを通じて、コーチングやトレーニングに関する論議をする機会がありました。これは、私にとってかけがえのない財産です。本書の執筆者は、高松研でともに学んだ学生たちを中心に構成されています。いずれも体育・スポーツ界で活動を続けていますが、競技スポーツに焦点を合わせると実践サイドの者（現コーチ、元アスリート、トレーナー、ジャーナリストなど）と研究サイドの者（研究者）に大別できます。高松研では「科学をよく知った競技者・指導者になろう。現場をよく知った研究者になろう」をモットーにしていましたので、執筆者はいずれかのサイドで活動しているにしても、今も実践と研究の場における様々な問題に関心を持っていると考えられます。本書では、サブタイトルに「実践と研究の場における知と技の好循環を求めて」を掲げています。これは、国際競技力のさらなる向上のためには、様々な競技スポーツ

にかかわる知と技を、実践サイドと研究サイドが連携して共創し、共有することを願ってのことです。加えて、これまでよく言われてきた「実践と理論の乖離」をなくしたいという願いがあります。

執筆者への原稿の依頼にあたっては、タイトルとおおよそのページ数のみを示し、テーマについては特に指示せず、各自がこれまで行ってきた競技種目または研究領域における関心事を、自由に記述して欲しい旨を伝えました。そのほうが枠にとらわれないのでよいと思ったからです。幸いにも、提出された42篇の原稿は、実践サイドでは6つの内容に、研究サイドでは4つの内容に括ることができました。小さい研究室からの将来展望ですので、質・量ともに内容不足のあることは否めませんが、本書がこれからの競技スポーツにおけるコーチング・トレーニングのあり方を考える際の一助になることを念願しています。

本書の刊行をもっとも待ち望んでいたのは、早逝された図子浩二元筑波大学体育系教授であると思います（2016年6月逝去）。指導者（陸上競技）として研究者（コーチング学）として活躍していた図子氏は、早くから高松研の仲間たちと一緒に本を出版することを提案していました。遅きに失していますが、本書を図子氏の墓前に献じます。（合掌）

最後になりますが、本書の出版に際して、多大なご指導ご鞭撻を賜った筑波大学出版会の運営委員会（委員長：茂呂雄二副学長・編集長：山口恵里子教授）の委員各位、編集事務に格別のご尽力をいただいた大久保明美さん、高島恵美子さん、影山和代さん、および制作会社の丸善プラネット株式会社の橋口祐樹氏はじめ皆さまに深甚なる謝意を表します。

2019年 晩秋

編集委員代表　高 松　薫

追　記

本書の出版準備中に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中に蔓延しつつあるために、「2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会」の 2021 年への延期が決まりました。すでに代表が内定している選手をはじめ関係者各位におかれましては断腸の思いでしょう。皆様方のこれまでの粉骨砕身のご努力を拝察すると心が痛みます。

このうえは、この大変な事態が 1 日も早く終息し、世界中が元気と笑顔を取り戻すことを祈るばかりです。加えて、2021 年の夏には、オリンピック・パラリンピックの旗のもとに、国内外の選手や関係者、ボランティア、応援者が一堂に会して、スポーツの素晴らしさを謳歌してくださることを、またそのスポーツの素晴らしさを世界中の皆様と分かちあってくださることを祈るばかりです。

なお、オリンピック・パラリンピックが 2021 年に延期しても、開催名称「第 32 回オリンピック競技大会（2020/ 東京）」と「東京 2020 パラリンピック競技大会」はそのまま継承されるので、本書では「2020 年」をそのまま用いることにしました。

2020 年 3 月末

編集委員代表　高 松　薫